

ご近所の お医者さん



府医師会保健医療
センター所長

鳴海善文さん

＝ 大阪市
天王寺区

肺がん検診と放射線科医

近年、AI（人工知能）を使った画像診断が急速な展開を見せています。

例えば、肺がん検診で胸部のレントゲンを撮って、肺の様子を画像で確認した経験がある方も多いと思います。そこにAIの機能を活用すると、

画像に写さ

れた肺と

骨、血管な

どに重なる

複数の病変候補が、赤や黄、緑などでマーキングされます。それをさらに画像診断専門医が診ることで、病変の候補を絞ることができます。

一方で、AIによって病気の見落とし

を防止できるものの、現状では数多

くの病変候補が上がってしまい、適切

に絞り込まないとCT（コンピュータ

断層撮影）による2次検査が相当な

件数になってしまいます。残念ながら、

それらすべてに対して2次検査を行っ

てしまうと被ばくの点で懸念が出てき

AIの活用と限界

ます。

しかしながら、AIは疲れを知らず、

集中力も途絶えませんので、膨大な母

数の肺がん検診において、その見落としを

防ぐのに適切な方法と言えます。

では、AI診断の技術が進展する中

で、画像診断医の役割とは何でしょう

か？

画像診断の3要素は、「病変の拾い

上げ」「良悪性の診断」「病期診断」

です。前述したとおり、病変の拾い上げはAIが病変候補を提示するとしても、発見された病変の良悪性の診断、病変の広がり（病期）診断の精度につ

いては、現状のAIはまだ放射線診断専門医に及ばないと考えます。さらに、

提示された検診の画像情報から、適切な次の画像検査を臨床医に提示するこ

とや、その後詳しく検査するためにCTを用いて

生体組織の採取を行う

ことも、画

像診断専門医の大事な役割です。総合

的な臨床診断は、現状のAIではいま

だ途上だと考えます。

蓄積された臨床情報、画像情報、病

理学情報によって、将来的にAIの精

度が向上していったとしても、画像診

断の最終的な決定と責任をAIに任せ

ることは難しく、画像診断医に蓄積さ

れた経験に基づく診断能力が不可欠で

す。そこに存在意義を見いだして日々

精進することの頃です。

精進することの頃です。

